

男性性の傷つきに敏感なジェンダー臨床論のために（その1）

For Gender-Sensitive Clinical Approach to Wounded Masculinity (1)

國友万裕（同志社大学）・中村 正（立命館大学）

KUNITOMO Kazuhiro (Doshisha University) , NAKAMURA Tadashi (Ritsumeikan University)

Key words:男性性, ジェンダー, 被虐待体験

目的

男性への支援はいかにして主題化され実践されうるのだろうか。これまで支援と臨床の場に男性（性）はどのように登場してきたのだろうか。ドミナントな男性ジェンダー論は女性や弱者を抑圧する加害性を強調する。臨床の対象となる男性がいてもそれは個人の問題として主題化される傾向があり、ジェンダー臨床的な集団カテゴリー化とかかわる被害性において男性（性）を捕捉することは少ないと思われる。男性性ジェンダーに敏感な支援と臨床論を展開し、社会臨床的な学的営為に資することが本発表の目的である。

方法

ナラティブ的手法を用いてエピソードの「深い記述 depth description」を試みる。ドミナントストーリー化したジェンダー物語があると仮定し、それとは異なる被虐待体験に焦点をあてることで男性性のもつ複層性（スペクトラム）を抽出し、男性的体験のジェンダー構造化を試行的に試みる。認知行動的変容にかかわる援助実践の際のアセスメント手法の構築にも資するテキストマイニング的アプローチという方法の一環を成すものである。

結果

その「深い記述」の視点として、男性のジェンダー体験の構造化にかかわるファクターを以下のように抽出した。

第一はスポーツに関するエピソード群である（たとえば体育の授業について。スポーツができないとサッカーや野球など男の子らしい遊びもできず、日常が苦痛になる。教師から「なぜ、これくらいのことできないのか」と怒られる。自尊感情に関わる問題群と位置づける）。

第二は身体調教と暴力・体罰にかかわるエピソード群である（男子のみ殴られる教育。男の子は将来、一家の大黒柱にならなきゃいけないという偏向が口癖の女性教師の存在。男子に厳しいダブルスタンダードの存在）。

第三はセクシャリティにかかわるエピソード群である（おかまというラベル付けなど。スポーツができず、女の子と遊んでいると女子からおかまと言われる等。「おかま」というラベルは男性性形成期に自分が「男ではないのではないか」と思う心的状況をつくりだす）。

第四は女子からのいやがらせにかかわるエピソード群である（思春期特有の行動にねざした女子集団からの嫌悪的発言による被虐待体験。男性的でないことを根拠にした「気持ち悪い」という言葉はいじめとなる。他の男性友達にも相談できない閉塞をもたらす。ある種のモラルハラスメント的事態が支配的な男性性をもたない男性に向けられる事態である）。

第五はジェンダー同一性にかかわるエピソード群である（ジェンダー同一性障害的な様相となる被虐待体験をもつ男性は同一化できる男子が周りにいないため、男性的アイデンティティ形成に困難をきたす。男らしさを理不尽に感じ始め、男っぽいを拒否するようになる事態。映画など、芸術・芸能の世界にひきこもる傾向が生起する。孤立化傾向も伴う）。

第六は同性同士の関係にかかわるエピソード群である（男の仲間に入るのが苦手となり同性同士の関係構築を体験できなくなる。ホモソーシャル性形成の課題を残すこととなる。集団になかまいることが苦痛となる。恋愛や結婚の夢ももてずに学校では不登校になる）。

考察

ドミナントなジェンダー規範として存在している男性性は性的同一性を形成する過程とパラレルに進行するジェンダー同一性形成過程に内在して生成し、社会的な規範もそこに埋め込まれていくが、そうではない男性性をもつ男性のジェンダー体験は場合によっては被虐待体験として存在し、それをもとにした性と生の困難をもたらすことになる。この過程を精緻に描くための深いエピソード分析をとおして傷ついた男性性ジェンダーの支援と臨床論構築の手がかりを得ることができると考えている。

文献

國友万裕『マッチョになりたい』彩流社、2011年
中村正『社会と臨床』について記述すること 立命館大学応用人間科学研究科10周年記念論文集（印刷中）